

激動の歴史を新しい視点から学ぶ
日本近現代史

日清戦争と朝鮮の近代化

0, 日清戦争はどのような戦争だったのか

時期：1894（明治27）年～1895（明治28）年

基本的には**日本と清（中国）** 両国の間の戦争

+ 日本と（A朝鮮政府）・（B朝鮮民衆）・（C 住民）

戦場は：（D朝鮮半島）と黄海、清の東北部（「満州」）南部など
+（E ）

戦争の原因：（F 朝鮮 ）のあり方をめぐる日・清の対立など

戦争の結果結ばれたのは（G 日清 ）条約

日清戦争がもたらしたもの

- ①植民地の獲得＝帝国主義国の仲間入り→列強の一角へ
- ②（H ）情勢のさらなる混乱
- ③日本における（I ）成立
- ④50年にわたる断続的な「(J)の時代」のはじまり
- ⑤日本人の対中国・アジア意識の変化

I、朝鮮王国の歴史



朝鮮半島、朝鮮王国（大韓帝国）の歴史



- 1392 李成桂、朝鮮建国
- 朱子学の官学化
- 1446 世宗、訓民正音を公布
- 1575 両班の党争の活発化
- 1592 壬辰倭乱（文禄の役）
- 1597 丁酉倭乱（慶長の役）
- 1637 清に服属
- 1860頃崔濟愚、東学を創始
- 18高宗の即位（大院君の政治）
- 1874 高宗の親政開始
- 1875 江華島事件⇒76日朝修好条規
- 1882 壬午軍乱 1884甲申事変
- 1894 東学農民戦争⇒日清戦争（～95）
- 1897 国号を大韓帝国と変更
- 1904 日露戦争⇒第二次日韓協約（05）
- 1910 韓国併合⇒日本の植民地に

朝鮮の建国と日本・女真族の侵略

◎1392 李成桂が建国

=朝貢・冊封関係にもとづく「属国」

朱子学を官学とし、科擧(公務員試験)の科目に

⇒党争(官僚・学派の対立)の活発化

◎1592~豊臣秀吉の侵略(壬辰丁酉倭乱)

→1607朝鮮通信使派遣=善隣関係樹立

1609己酉約条=対馬を窓口とする国交

・貿易の開始、釜山に草梁倭館設置

◎17世紀前 女真族=清(後金)の侵略

⇒小中華主義の形成

1392 李成桂、朝鮮建国

→朱子学の官学化

1446 世宗、訓民正音を公布

1575 両班の党争の活発化

1592 豊臣秀吉の侵略

(壬辰・丁酉倭乱~98)

1607 「朝鮮通信使」を派遣

1627・36 清の侵略、服属

(丁卯胡乱、丙子胡乱)

18世紀後半 実学の誕生

1800 正祖死亡・勢道政治へ

19世紀前半 民乱の頻発

1860ごろ 崔濟愚、東学を創始

1863 高宗即位・大院君の政治

清の「属国」と、小「中華」思想

朝鮮…「明」の属国として発展＝壬辰・丁酉倭乱でも援助をうける

⇒官学として朱子学を受容

17世紀前半 女真族(清)の侵略を受け服属

1627丁卯胡乱、1636丙子胡乱

1644清の中国支配へ(明清変態)

明清変態…「夷狄」の女真族が「中華」として
君臨し、朝鮮を属国に

小中華思想…清に臣従はするが、朝鮮こそ
朱子学＝『中華』の正統な後継者である。

⇒世界から学ぶ姿勢をなくし、形式主義化・独善化し、党争を繰り返す。

「朝鮮には『長崎』がなかった」(姜在彦)



18世紀末、実学を重んじ「小中華」の
伝統に一石を投じた国王・正祖を
モデルとした韓国ドラマ「イサン」

第一次修信使・金綺集のことば

(1876年)

わが国の学問は、五百年來ただ朱子あることを知るのみ。

朱子に背く者は

ただちに乱賊をもってこれを誅し、

科挙に応ずる文字に至るまで仏氏や老子の語を用いる者は、
遠地に追放して許さない。

国法が極めて厳しいから、上下貴賤にとってただ朱子あるのみ。

君が君たり、臣が臣たり、父が父たり、子が子たり、

兄が兄たり、弟が弟たり、夫が夫たり、婦が婦たる所以は、
いちずに孔孟の道理に遵うからで、

他の道に迷い、他の術に惑わされることがない。(姜80)

大院君の政治と挫折

① 1863 高宗即位・実父・大院君の政治

王権の強化と強硬な鎖国攘夷政策「衛正斥邪」論=朱子学原理主義の立場をとる

- ・勢道政治や両班勢力を排除
 - ・王権の拡大をめざす
 - ・米・仏勢力の侵入を撃退
- 日本を「欧米の走狗」とみなす

② 1873 癸酉政変…高宗親政（閔氏政権）の実現=大院君失脚

改革の停止、日本との交渉の開始



興宣大院君（李暲応）1820～98
高宗の実父・幼い高宗を後見する形で強権的な改革と攘夷政策を実施したが、高宗が成長するなかで王后閔妃らと対立、政権を追われた。

Ⅱ、朝鮮の開国と近代化をめぐる混乱



日本との対立と征韓論

①朝鮮がみた明治維新＝日本は「欧米の走狗」となった

「キリスト教徒となった天皇が西洋の助力を得てなしとげた」

日本と修好すればキリスト教、西洋勢力の侵入の危険性がある

②1870年、日本の外交文書（「書契」）の受け取り拒否

形式の一方的変更、「皇」「勅」という「不適切な文字」の使用

→1872、使者との面会も拒否

←③1873年、草梁倭館（朝鮮が対馬藩に貸し与えていた）を
一方的に接收、日本公館とする

④「倭館」前に行為の不当さと西洋化政策を非難した文書を掲示

←⑤日本国内で「**征韓論**」沸騰

江華島事件と日朝修好条規

1874 日本との交渉開始

→文字・服装などで停滞

→日本側＝軍艦を用い示威行為を開始

1875 **江華島事件**発生

日本軍艦の挑発にたいし、朝鮮側が発砲

1876 日本6隻の軍艦とともに来訪、

外交交渉を開始

→ **日朝修好条規（江華島条約）**を強要

＝朝鮮側の外交的知識不足に乘じ、不平等条約を強いる。

以後、朝鮮政府、開化政策をすすめる→大院君らの強い反発



日朝修好条規＝日米条約よりも「不平等」

- (1) 「朝鮮国は自主の邦にして日本と平等の権を保有せり」
- (2) 外交使節の首都派遣の規定
- (3) 釜山ほか 2 港の開港と自由貿易
- (4) 開港場における居留地の設定
- (5) 領事による居留民の管理
- (6) 領事裁判権
- (7) 釜山の波止場から四キロ以内
および東萊府への内陸旅行・通商権
- (8) 開港場における日本貨幣の流通
- (9) 米穀輸出の承認
- (10) 輸出入税の免除（無関税）



交渉の様子を写した写真

⇒ 高宗は、これまでの日朝関係の延長線上と判断

壬午軍乱(1882)の発生

①朝鮮（閔氏）政府、開化政策をすすめる＝日本に接近

⇒大院君など衛正斥邪派との対立激化

②日本の援助下に西洋式軍隊（別技軍）の整備

⇒旧式の軍隊の兵士の不満爆発

⇒武装蜂起(壬午軍乱)発生

③漢城の下層民らも合流

再起をめざす大院君一派と結合

④大院君、閔氏一族から政権を奪取

⇒一部は日本公使館を襲撃

⑤日本公使ら、いったん日本に逃亡



蜂起したソウルの兵士・民衆

壬午軍乱(2) 清の影響力拡大

⑥日本・清、両国軍、朝鮮へ相次ぎ出兵

⑦清…大院君政府を倒し、閔氏政権を復活

以後、清軍の朝鮮駐屯⇒影響力行使へ

※清の政策変更…不干渉政策から干渉政策に

華夷体制下の属国から、欧米流の属国に

⇒日本への補償（済物浦条約）朝鮮の開国を促進

⑧日本…清との軍事力の差を実感

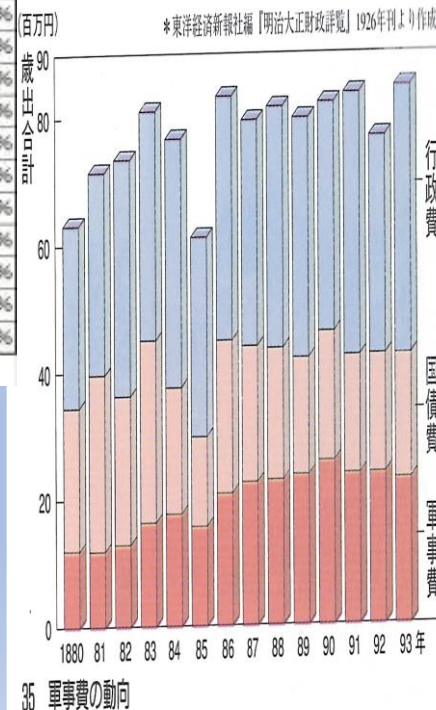
⇒軍備拡張を本格化

⇒陸：専守防衛型から外征対応型に

海：艦隊増強

軍事費の推移					
年度		歳出総額	総軍事費	軍事/歳出	対GNP比
		千円	千円	%	%
1875	明治8	69,203	9,785	14.14%	
1876	明治9	59,308	10,329	17.42%	
1877	明治10	48,428	9,203	19.00%	
1878	明治11	60,941	9,249	15.18%	
1879	明治12	60,317	11,257	18.66%	
1880	明治13	63,140	12,009	19.02%	
1881	明治14	71,460	11,852	16.59%	
1882	明治15	73,480	12,410	16.89%	
1883	明治16	83,106	19,194	23.10%	
1884	明治17	76,663	17,487	22.81%	
1885	明治18	61,115	15,512	25.38%	1.92%
1886	明治19	83,223	20,523	24.66%	2.57%
1887	明治20	79,453	22,452	28.26%	2.74%
1888	明治21	81,504	22,786	27.96%	2.63%
1889	明治22	88,756	23,584	26.57%	2.47%
1890	明治23	73,082	25,692	35.16%	2.43%
1891	明治24	83,555	23,682	28.34%	2.08%
1892	明治25	76,734	23,768	30.97%	2.11%
1893	明治26	84,581	22,832	26.99%	1.91%
1894	明治27	185,299	128,427	69.31%	9.60%
1895	明治28	178,631	117,047	65.52%	7.54%
山田朝『軍事拡張の近代史』（吉川弘文館1997）p10、11より作成					

山田朝『軍事拡張の近代史』（吉川弘文館1997）p10、11より作成



甲申事変（1884）と天津条約

①朝鮮政府・開化派内部の分裂

- 1) 事大党…清の属国＝「小国」として近代化をめざす。
- 2) 独立党…「属国」を拒否。日本型の近代的主権国家をめざす。

②甲申事変…独立党の金玉均らによるクーデタ

日本公使館・軍の援助をえる

⇒要人を殺害、独立党政権樹立

③閔妃らの要請を受け清軍が鎮圧

⇒金玉均らは日本に

④日本、軍隊を派遣、朝鮮に補償を要求

⇒漢城条約を締結

⑤天津条約＝日清間の妥協成立

- 1) 日清両軍の朝鮮撤退
- 2) 出兵に際しての相互通告



清軍が出動すると日本軍はすぐ撤退。
公使は仁川から帰国、金玉均らの同行を
拒もうとした。

Ⅲ、日清戦争前夜と国際情勢



朝鮮から日本へ運び出される大量の穀物



東学農民運動の指導者・全琫準

清の影響力拡大

①甲申事変・天津条約以後、日清間は平穩に

日清両軍の朝鮮からの撤退

日清両国の軍事力の整備すすむ

②清の朝鮮への介入（属国化）の進展

1) 宗主国としての立場を、諸国にも強調

2) 「中朝商民水陸貿易章程」締結

中国の特殊な権益を規定、輸出拡大

③日本および欧米列強の反発

④朝鮮＝高宗の清への不満

⇒ロシアへの接近を図る



袁世凱(1859～1916)
宗主国・清の代表として権力を行使した。のち中華民国の臨時総統

朝鮮をめぐる国際情勢

清…**宗主国としての特殊な権利を主張**

⇒日本・ロシアなどの影響力拡大を嫌う。

朝鮮(高宗)**ロシアの援助＝属国化を要望**

→朝鮮政府、高宗の工作を清に通報

⇒清(袁世凱)しめつけ強化・大院君帰国

日本…朝鮮への清・ロシアの影響力拡大を嫌う

⇒**朝鮮の「独立」⇒「改革」を要望。**

ロシア…**朝鮮進出には慎重。海軍は前向き**

最大の敵・英の動きに神経質

イギリス…**ロシアの基地を獲得を恐れる**

⇒1885、**巨文島事件**をおこす



メレンドルフ
(1847～1901)

ドイツ人。李鴻章の推薦で朝鮮の外交・財務顧問となる。のちロシア接近をすすめる。



巨文島事件...1885年イギリス艦隊が朝鮮海峡にある巨文島を占領した事件。ロシアと朝鮮政府との接近を嫌った。87年、清の仲介で撤退。

朝鮮国内の矛盾の高まり

日本による経済進出

綿布（当初は欧米製）を売って穀物を買占める

→経済構造の破壊すすむ

→防穀令（=輸出禁止令）→補償要求

朝鮮政府の財政難=売位売官で補填

→地方官・要した費用を転嫁

→本来の賑恤機能の破綻

=「仁政」に反する行いとされる



民衆の疲弊と政府不信

⇒国王への期待感

米の対日輸出力 (越12P96より)

年	輸出(円)	年	輸出(円)
1885	27,201	1896	2,852,050
1886	10,523	1897	6,009,050
1887	128,948	1898	2,704,887
1888	21,472	1899	1,689,909
1889	54,394	1900	4,694,167
1890	2,540,652	1901	6,009,541
1891	2,225,043	1902	3,961,312
1892	1,348,796	1903	4,781,218
1893	470,208	1904	1,578,629
1894	810,475	1905	1,268,502
1895	888,022		



朝鮮から輸出される大量の穀物

「東学」の成立と発展

1860年没落両班の崔濟愚が民間信仰と儒・仏・仙をもとに創始した宗教。

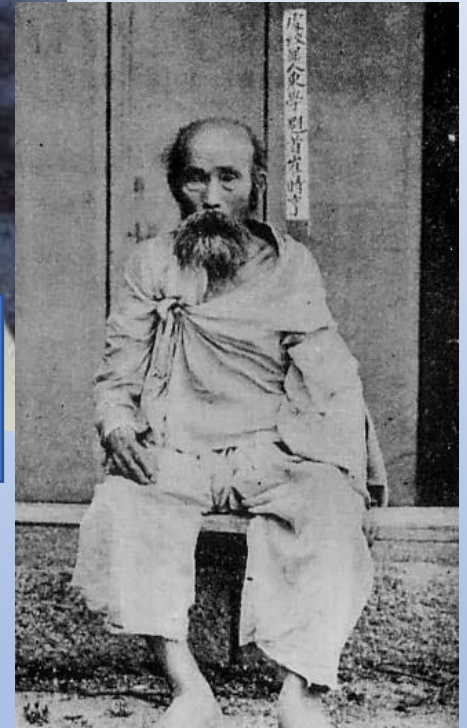
欧米列強の武力の基礎にある「西学＝天主教」に対抗し「輔国安民」を説く。「人すなわち天」とする人間の平等思想をもち、修行により「済病長生」が可能になり、さらには世直しの「後天開闢」により身分的差異のない地上天国が実現する、と説いた。

第二代教主崔時亨は「修養」を重視、秩序への従属をもとめる傾向を強める。

また余力のある者が貧しい者を助けるコミュニティという役割を持ちつつ拡大した。



崔濟愚(1824～64)
東学の創始者・大院君
政府に処刑された



崔時亨
(1827～1898)
東学の二代目教主

IV、日清戦争



東学農民戦争（1894）の発生

- ①1894 全琫準ら、悪徳地方官に反対し蜂起
⇒全羅道や忠清道などに拡大（東学農民戦争）
→5月末、全州を占領

農民軍の要求

- 1) 税をむさぼる強欲な悪い役人を辞めさせる
- 2) 税のあり方の変更と不当な徴税撤廃
- 3) 外国商人の不当な活動の禁止

- ②農民軍と政府側で全州和約成立
農民戦争の解決・農民コミュニティの成立へ
←日・清両軍の出兵への対応



東学農民戦争関係地図

日清両軍の出兵

①東学農民戦争の拡大＝朝鮮側での鎮圧困難に

②朝鮮政府、清に派兵を依頼

（首謀者は？袁世凱、閔泳駿、高宗）

→清、出兵へ＝日本情勢を読み誤る

→天津条約にしたがって日本に通告

③情報を事前につかんだ日本も派兵準備

→通告と同時に大軍を派兵

④全州和約の成立＝農民戦争解決

→朝鮮政府、両軍への撤兵要請

⑤日本撤兵を拒否（同時撤兵も）



仁川に上陸する日本軍

日本側の事情 帝国議会の行き詰まり

①条約改正交渉の進展

→議会（旧改進黨＋体外硬）、反対決議を乱発

→第二次伊藤内閣、対抗し議会を解散

②清との緊張＝対外緊張による事態打開を図る

③陸奥宗光外相・川上操六参謀次長

⇒開戦を想定して、大軍を派兵

※手ぶらで帰ってくれば政府は崩壊の危機に

陸奥外相・大鳥公使…強引に開戦に持ち込む

④7月16日 日英通商航海条約締結（条約改正）

⑤7月25日 日清間の戦闘開始



陸奥宗光（1844～97）
日清戦争時の外相。条約改正の実現と朝鮮での事態打開、国内対立をそれるため、陸軍参謀次長川上操六と謀り、大規模な出兵をすすめた。

7月23日戦争と日清戦争勃発

- ①日本、東学農民戦争の鎮圧への協力を口実に大軍を派遣
⇒全州和約後も増兵
- ②撤兵を拒み、開戦の口実を探る
「自主独立実現」「朝鮮の内政改革」などを主張
- ③朝鮮側…申し入れを拒否、撤兵を要求
- ④7月23日…日本軍、朝鮮王宮を襲撃
 - ・国王夫妻を確保⇒大院君を摂政に
 - ・金弘集開化派親日政権成立⇒甲午改革へ
- ⑤日本、朝鮮政府の要請を口実に戦闘を開始
⇒清に宣戦（日清戦争の開始）



日清戦争開戦

①7月16日 **日英通商航海条約締結（条約改正）**

⇒イギリスとの友好関係の実現

②7月23日 朝鮮王宮占拠（**7月23日戦争**）

= 「親日」政権樹立

③7月25日 **豊島沖海戦**・高陞号事件

清国軍を大量に積んだイギリス船を沈める

⇒国際問題化？

④日本、朝鮮政府の要請を根拠に清軍を攻撃

7月29日 **成歓の戦い**

牙山に駐屯していた清軍を攻撃⇒勝利

⑤8月1日清に宣戦布告



日清戦争関係地図

戦局の推移

<陸軍>

- ①7月29日 **成歓の戦い** = 牙山の清軍を破る
- ②8月 1日 **清に宣戦布告**
- ③9月16日 **平壤の戦い** = 清の大軍撤退
⇒以後、**戦場は「満州」(東北部)**へ
- ④11月 大連・旅順占領 (旅順虐殺事件発生)
- ⑤95年2月 威海衛占領

<海軍>

- 7月25日 **豊島沖海戦・高陞号事件**
- 9月17日 **黄海海戦** = **日本が制海権を握る**
- 95年2月 威海衛包囲作戦 = **清国海軍を壊滅させる**



旅順虐殺事件

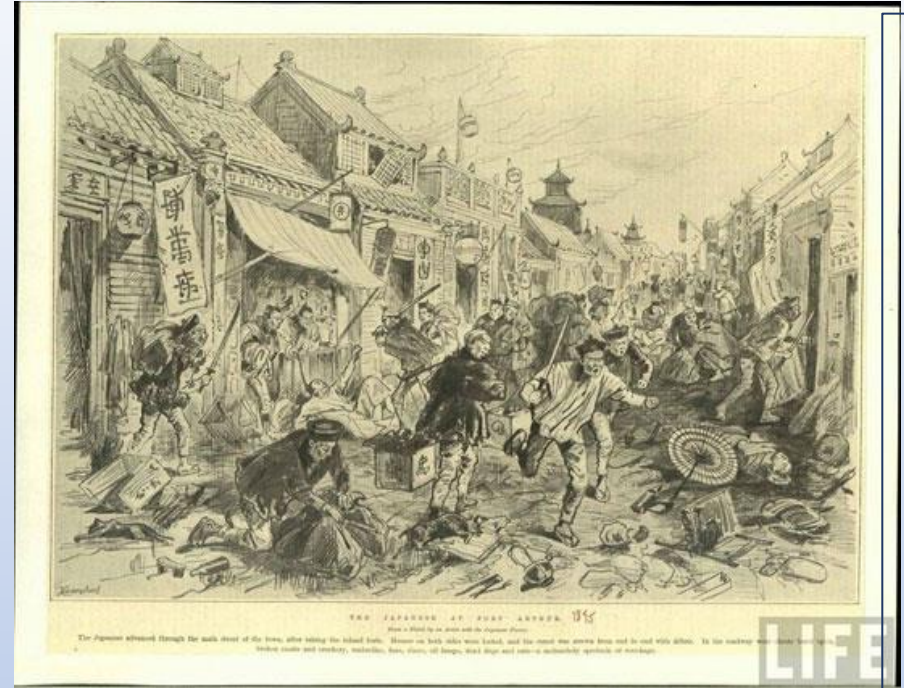
1894年11月旅順攻略戦で発生した
虐殺事件。

清軍の捕虜虐殺に激怒した日本軍が、
清の捕虜、婦女子・老人を含む一般
住民を大量に虐殺した。

外国メディアが報道し問題視され、
非難が殺到した。

軍・政府はいったん事実を認めた
がのちごまかしに終始した。

この事件による処罰は行われな
かった。



←旅順虐殺事件を報じ
た外国紙の記事

→旅順の慰霊碑
事件の発生した日時が
刻まれている



参加陸軍した陸軍の兵員

日本陸軍

七個師団 24万 616人(海外勤務17万4017人)

文官・雇員 6495人(海外勤務 4275人)

軍夫(臨時雇用の軍属) 15万3974人

※軍人軍属の合計 約40万人(海外勤務30万人以上)

参考: 日露戦争124万3174人(戦地勤務99万9689人)

清国陸軍

勇軍(郷勇)+練軍(八旗・緑營の選抜軍)35万人

新規の募兵 63万人

※合計 98万人



物資の輸送は、こうした軍夫と呼ばれた軍属によって担われた

海軍の比較

日本：軍艦28隻水雷艇24隻 総トン数5万9000トン
新鋭艦が中心・統一的な司令部のもとに行動
清：軍艦82隻水雷艇25隻 総トン数8万5000トン
世界最大級の大型艦 定遠・鎮遠、
他は旧型船が多い
指揮系統…北洋・南洋・福建・広東の四水師
に分かれそれぞれの大員・総督が指揮
参加したのは北洋＋広東の一部のみ



豊島沖の海戦

劣勢のはずのなぜ日本が勝ったのか ～清の近代化の困難さと不十分な富国強兵

①清の不十分な富国強兵…「**中体**西用論」「洋務運動」

清…政治改革が不十分なまま、主に軍備や科学技術を導入
国民の意欲を引き出すことができない

日本…政治変革(=倒幕・天皇制国家建設・中央集権化)と並行
新政府による徹底した「富国強兵」で国民の意欲を引き出す

②李鴻章の嘆き

海軍装備などは明らかにまさるが、ソフト面の課題が存在
軍事思想、指揮官と兵士の意識・能力、軍人・兵士の地位。
鎮遠・定遠の二大軍艦を「張り子の虎」として利用。

③光緒帝と側近…装備の優秀さに幻惑され、質を問わない



李鴻章(1821～1901)
中国の政治家・軍人
太平天国の乱鎮圧をきっかけに台頭。北洋軍を建設、
清末期の政治・改革を主導
した。下関条約を調印

なぜ日本が勝ったのか ～新興の「国民国家」の形成

①新興国家の性格＝「当事者意識」

新しい国家・軍隊の「創業者」としてのリーダーたち
実力主義・世界の知識からの積極的な受容

②国民国家の形成＝「自分の国」意識

- ・学校教育の定着
- ・憲法制定と帝国議会開設
 - ⇒挙国一致の国論形成（「感謝決議」など）
- ・憲法・教育勅語 ⇒「万世一系」の神話定着
- ・条約改正実現 ⇒国民的課題の一応の解決

③日清戦争のなかで

- ・ナショナリズムをあおるメディア
 - ⇒命を投げ出す兵士・国民一致の強要

「国民（＝「日本人」）」の創出

「日本人」とは

同じ言葉（共通語）を話し

同じ物語（神話や「歴史」・将来像・理想像・正しい生き方）を共有し、

同じ民族であるという「感覚」を共有し、

「命を捧げておかまわぬ」という感情をもつ。

こうした日本人が明治に「創られ」、
日露戦争に兵士として参加した！

VI、日清戦争の中で～朝鮮半島で



金弘集親日開化派内閣成立

1, 1894年親日開化派**金弘集内閣**成立

⇒日本の軍事行動へ協力

⇒本格的な改革に着手（**甲午改革**）

2, 食料や人夫の徴発に協力

⇒農民や政府の高官・地方官による

反日運動の発生

3, **第二次東学農民戦争＝反日蜂起**

→日本軍とともに政府軍も鎮圧に



金弘集(1842～1896)
日清戦争下、日本と協力し、
朝鮮初の本格的な近代化政
策を推し進めた。しかし王
や民衆の反発を買い、殺害
された。

金弘集内閣のもとでの「改革」

(1) 開化派による近代化（※戦後分も含む）⇒これまでの課題解消の面

- ①王権制限 ②内閣制度導入 ③科挙の廃止 ④儒教の排除
- ⑤軍隊警察改革 ⑥地方制度改革 ⑦財政の一本化と予算制度
- ⑧幣制改革 ⑨度量衡統一 ⑩近代的裁判制度 ⑪縁坐制の廃止
- ⑫学校教育制度 ⑬留学生派遣 ⑭封建的身分制度廃止
- ⑮賤民制廃止・⑯太陽暦採用 ⑰早婚禁止 ⑱断髪令

(2) 日本への協力と日本の意向を受けた改革⇒日本の進出を加速する面

- ①内政改革施行 ②鉄道の早期敷設 ③軍用電信の条約化
- ④新たな貿易港開港 ⑤景福宮襲撃（7月23日戦争）を不問に
- ⑥「自主独立」の合同会議開催 ⑦王宮警備の日本軍の撤退

※「日兵の進退および其糧食準備の為、及ぶだけ便宜をあたうべし」

金弘集内閣成立～二つの評価

①「日本の手先」

- 1) 7月23日戦争の結果、日本軍のもとで成立
- 2) 「親日派」を多く含み、日本の影響下で改革
- 3) 日本軍の軍事行動を容認、協力を要請
- 4) 日本軍とともに東学農民軍を鎮圧



②全面的な近代化(甲午改革)をすすめた内閣

「封建的伝統秩序を打ち破ろうとする、制度面における近代的改革であったことに間違いはない。」(1990版韓国国定教科書)



⇒かつての北朝鮮も高い評価を与えた

甲午改革＝「朝鮮近代化」の苦闘と日本

(1) 朝鮮にとって近代化の二つの課題

A, 「反封建」…伝統的な社会と政治支配・「小中華」思想からの解放

B, 民族の自立・独立…「宗主国・清」・日本・欧米列強との関係調整

(2) 朝鮮諸勢力の苦闘＝二つの課題へ、それぞれの対応

①「衛正斥邪」論(大院君?)…伝統的価値遵守、Bを重視、Aと日本を敵視

②独立党(金玉均ら)…清の影響力排除。王朝の近代化(⇒Aの実現?)

③東学農民戦争…民衆の力でのAの実現。国王幻想⇒Bも視野に

④甲午改革(金弘集ら)…日本の力を背景に、Aを上から本格化

⑤高宗夫妻…国王独裁実現下での上からの改革・ロシアの援助に期待

(3) 日本…自国の影響力拡大＝清・ロシアの影響力排除、をめざす

つごうのよい「独立国」朝鮮としての改革を希望

⇒しだいに「保護国」化をめざす

日本軍の優勢～日本の方針が変わる

①対朝鮮方針の閣議決定

陸奥外相、「完全独立・保護国化・日清の共同
管理・永世中立国化」の4案を提示

⇒閣議は乙案「保護国化」を選択

「名義上独立国と公認するも、帝国より間接に直接に、永遠もしくは長時間、その独立を保翼扶持し、他のあなどりをふせぐるの労をとる」（陸奥が示した乙案）

②これに適した朝鮮の改革を促進＝井上馨を派遣

朝鮮の国内改革（日本型「立憲君主国」＝国王の権限削減、日本人官吏の採用）を促進する

⇒国王夫妻の反発

③さらに領土獲得に向けた軍事作戦に移行 ＝満州（遼東半島）・台湾など



井上馨（1836～1915）
長州藩出身・元老の一員で伊藤の盟友。ながく政府中枢に参画、外務大臣などを歴任。

第二次東学農民戦争

「もうひとつの日清戦争」

- ① 東学農民軍は日本軍の協力を拒否
⇒ 「忠君愛国」の義兵として再蜂起。
- ② 規模の拡大＝朝鮮の半分程度にまで広がる
「偽東学党」も出現
- ③ 参加者…のべ13万4750人(原田敬一)
数十万人(趙景達)
- ④ 日本軍・政府軍・両班義勇軍による鎮圧
参謀次長の川上操六は「悉く殺戮すべし」
との命令
- ⑤ 少なくとも5万人ほどの農民が死亡した



捕らえられた農民軍
指導者全捧準

V, 下関条約と台湾掃討戦



「勝利の傲慢」外国紙に掲載された報道画



下関講和会議



台湾平定戦で戦病死した北白川宮の銅像。台湾大神宮の祭神とされる。

下関条約～東アジアを変えた条約(1895,4)

1) 全権：伊藤博文・陸奥宗光（日本）vs 李鴻章（清）

⇒ **伊藤ら、領土割譲と賠償金獲得に強く固執**

「戦争の結果たることを諒知せられたし」

＜締結内容＞

- ① 朝鮮の独立を承認
- ② 台湾と澎湖諸島・遼東半島を譲渡
- ③ 2億両の賠償金
- ④ 4港の開港
- ⑤ 日清修好条規破棄⇒不平等条約の締結

2) 伊藤らの強硬論の背景

- ① **陸軍（⇒遼東半島）と海軍（⇒台湾）の対立**
- ② **戦勝に乗じた強硬な国内世論⇒国民国家の危険な側面**



講和会議の舞台となった下関・春帆楼

李鴻章の批判

～日本は、一つの石つぶてで二羽の鳥を捕ろうとしている。

李の主張：**日本の戦争目的の「朝鮮独立」のはず。**

- ①日本は「朝鮮独立」を確約すべき
- ②清の領土「遼東半島」の割譲は筋違い
⇒不当性をロシアに訴える=三国干渉に
- ③占領もしていない台湾割譲も筋違い
- ④戦費1.5億円に対し3億円の要求に根拠がない
- ⑤最恵国待遇は双方に適用されるべき



調印時：「**(伊藤)閣下はこれほど『厳酷執拗』な人とは思わなかった**」

⇒**清の挫折感=近代日本への強い警戒心・不信感として残る。**

ロシアに接近、露清密約(=東清鉄道の権益譲渡)に

三国干渉と東アジア情勢の激変

①日本…交渉経過をイギリスにのみ連絡。他国の反発

②**三国干渉**「**下関条約に強く抗議**」

ロシア・ドイツ・フランス…遼東半島返還を要求し、
軍艦を派遣

⇒日本側、**遼東半島返還に応じる**

<下関条約・三国干渉の歴史的意義>

①国内での**ロシア脅威論**の高まり

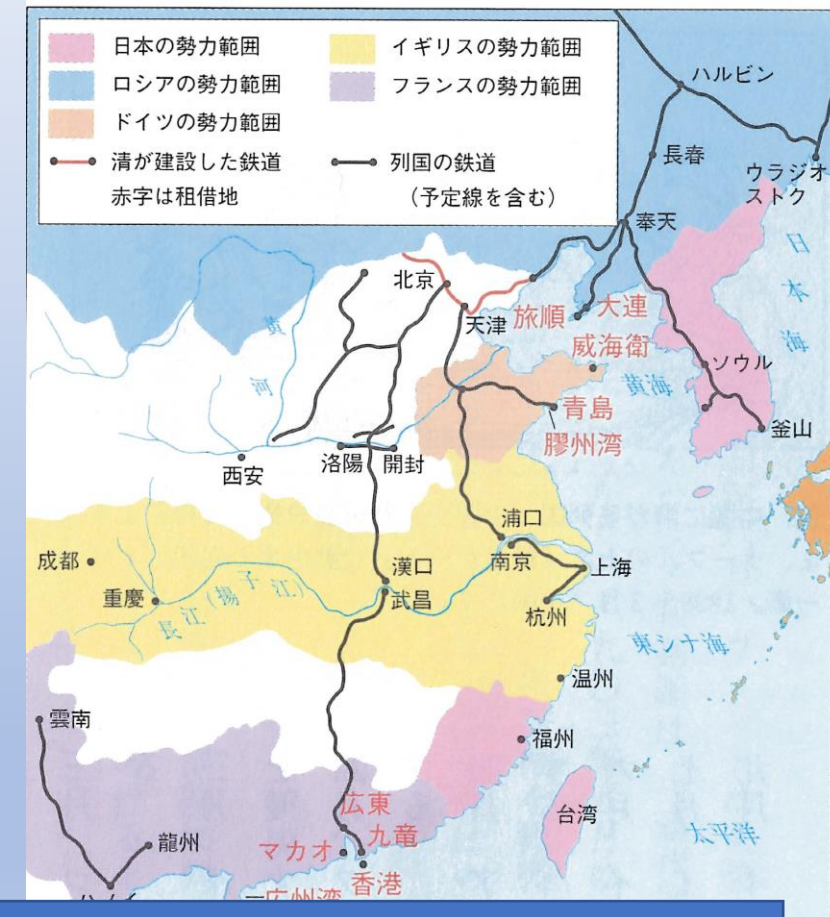
⇒軍拡容認・ナショナリズムの高まり「**臥薪嘗胆**」

②**東アジア、とくに中国情勢の激変**

中国の債務国家化と「**中国の瓜分**」(半植民地化)

③**朝鮮での反日本勢力の復活**

⇒親日勢力の退潮・「**改革**」の停滞



東アジアでの半植民地化の進展

朝鮮における日本勢力の退潮

①三国干渉＝「日本がロシアに屈服した」

- ・高宗・閔妃、日本からの離脱・ロシア接近を進める
⇒日本側、失地回復をはかる

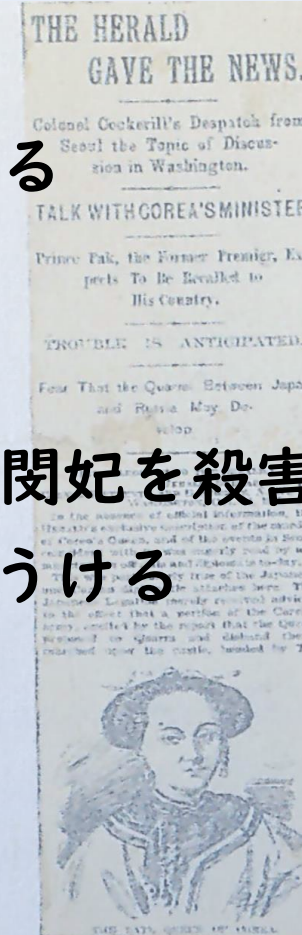
②閔妃殺害事件

- ⇒ 公使・三浦梧楼、反日派の中心と見なした王后・閔妃を殺害
⇒ 国際的な非難、さらに朝鮮国民の強い反発をうける

③露館播遷 (1896/2~97/2)

- ①高宗一家がロシア公使館へ逃げ込む。
- ②親日派政権の崩壊と親露派の政権成立

ロシアの影響力増大⇒日清戦争、本来の目的は挫折！
⇒朝鮮におけるロシアとの対立激化

[illegible]

もうひとつの日清戦争～台湾での戦争

台湾…本土からの漢族が開拓した「フロンティア」

1885年、台湾省に(←台湾出兵の影響)

下関条約＝日本への割譲が決定

台湾住民＝「台湾民主国」を名乗り抵抗運動を開始



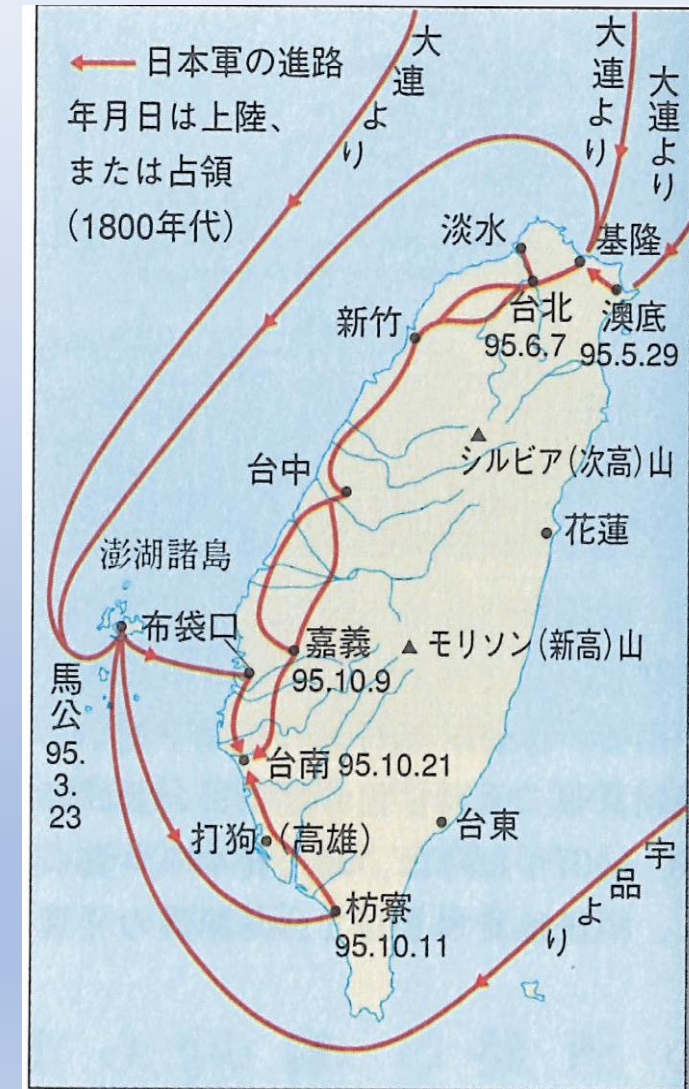
激しい戦闘(95/5～/10)さらに数年間のゲリラ戦

戦闘で14000人死亡、その後12000人が「死刑」などに

日本軍＝戦闘と疫病の蔓延で死者相次ぐ

平定戦での死傷者5320人、その後もあいづく

(北白川宮も病死。戦死説も)



日清戦争の日本軍の犠牲者

日清戦争の日本側の死者

①公式には戦死1415人 戦病死11894人

- ・戦病死者の圧倒的な数
(脚気・赤痢・コレラ・マラリア)
- ・この数は**正式な兵士のみ**、

②軍夫の死者は不明(7000人以上?)

⇒不十分な補給体制を大量の軍夫で補填。
動員者は約154,000人との推計

臨時軍事費(決算) (円)			戦死者 (人)	
収入	公債金	1億1681万	戦死	1415
	特別資金*	7896万	病死	1万1894
	その他	2946万	計	1万3309
計		2億2523万	〈『近現代日本経済史要覧』ほか〉	
支出	陸軍	1億6452万		
	海軍	3596万		
計		2億48万		

*のちに賠償金により繰り入れ返済。

③清軍の戦闘死 (戦病死を含まない) 約3万人?

おわりに～日清戦争(1894～5)とは

日本が戦った相手＝**清**（狭義の「日清戦争」）

朝鮮政府(7月23日戦争)、朝鮮民衆(東学農民戦争)

台湾民衆（台湾掃討戦）

戦場…**朝鮮・満州南部**（＋山東半島、黄海）、**台湾**

原因…**朝鮮支配をめぐる日清の争い**

条約改正をめぐる国内（とくに議会内）の対立

戦争の経過…日本の圧倒的優勢のうちに展開

→**対民衆戦（「東学」・台湾）、旅順虐殺事件**

大量の病没者の発生

戦争の講和…**下関条約**

日清戦争の持つ意味

- ①「外交上の失敗」としての下関条約
→列強の清への帝国主義政策を惹起
→「三国干涉」=ロシアとの対立激化
- ②**帝国主義国家・日本の誕生**
台湾の植民地化と軍事力による統治へ
朝鮮への抑圧、さらに失策を拡大へ
→**閔妃殺害事件・露館播遷・大韓帝国**
アジア諸民族への優越感=差別意識の広がり
- ③日本のあり方の変化
「**国民国家**」が一応完成。
議会・政党の体制内化=**立憲政友会結成**
- ④「**五十年戦争**」の開始
→絶え間ない対外戦争の時代に

「五十年戦争」

1894～日清戦争

1895 台湾掃討戦

1890 義和団戦争

1904～日露戦争

1914～第一次世界大戦

1918～シベリア出兵

1927～山東出兵

1931～満州事变

1937～日中戦争

1941～

アジア太平洋戦争

1945 敗戦

参考文献

原田敬一『日清・日露戦争』『日清戦争』、檜山幸夫『日清戦争』

大谷正『日清戦争』、木村幹『高宗・閔妃』

岸本美緒・宮嶋博志『明清と李朝の時代』、宮嶋博志『両班』

糟谷憲一『朝鮮の近代』、姜在彦『朝鮮の攘夷と開化』

趙景達『近代朝鮮と日本』、趙景達編『近代日朝関係史』

岡本隆司『世界の中の日清韓関係史』、

森山茂徳『近代日韓関係史研究』『日韓併合』

海野福寿『韓国併合』『日清・日露戦争』

中塚明他『東学農民戦争と日本』

和田春樹『日露戦争 起源と開戦上・下』

山田朗『軍備拡張の近代史』

高等学校用教科書・副読本（山川出版社・帝国書院・浜島書店など）